

六甲星見臺の藪部氏の新反射赤道儀

木 邊 成 麿

話しを受けたのが七月終りであつたと思ふ。『春に英國から送られて来た 47 cm の鏡では到底使ひ切れそうにもないので、暫定的に何か手頃なものはないか？』とのことであつた。そこで私は『20 cm 位の反射鏡なれば、さして無駄にもならないでせう』と御答へして置いた。

然し、同じ作るなれば永久に使へるものと云ふことになり、幸ひ 30 cm は前回に経験が一度あるので、条件がよく進む爲め、大體これと云ふことになつた。

藪部氏としても、20 cm 位が、それとも思ひ切つて 47 cm を作るか？、相當考へられた様であつたが、大體次の理由で 30 cm に結局定まつたのであつた。

(一) 遊星面観測、特に火星の観測を希望する。

〔英國天文協會から来たフキリップス師の意見に、“火星の有効な観測には 8—9 時程度でもよいが 12 時位が一般的に更に有効と思はれる”

又、土星は單位光度が淡いので口径の大きい必要がある。

木星は帯の緯度的移動の研究には時計仕掛と相當な口径と倍率が必要である……………

(二) 掩蔽に微かな星を見る爲めに、口径は大きい方が無論有効である。

(三) 微光變光星の追跡……………

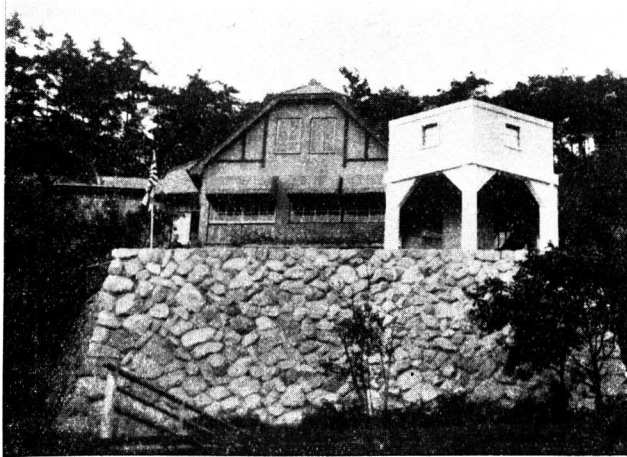
(四) 製作上から、鏡及び組立て等 30 cm が前回の経験がある故、好都合である。

以上、前三の理由では時計付き赤道儀は間違ひないとして、口径は 25 cm 位より 50 cm 位なれば、移動し得るので、最後のものと火星の条件が結局 30 cm に導いたものと思つて居る。勿論 47 cm は眼視鏡用でなく、又、マウンティングも新型である等……………結局、眼視鏡として大きい方で、最も標準の 30 cm 型に定まつたのは當然であると思ふ。(自分として 30 cm 級の反射が満足に使へる氣流が極めて僅かであることを惜むが……………)

着工は 8 月末位かと思ふ。途中で最も弱つたのは副鏡に 11 cm の屈折の筈であつたのが、都合で 15 cm が船で着いてしまつたので、急に變更したことであつた。レンズは「レイ」のものらしい。品は極上等とは賞め難いが、名

は信用出来る人である所が17位もある長いもので、筒が主筒より長くないので面喰つた。重さを考へて、屈折の方は全部アルミニウムで作つたが、出来ればヂュラルミンを使用するのが本當であろう。

兎に角、大きいので、筒の廻轉とは別に取り付けた。工作が途中で遅れて、年内にどうかと心配したが、幸ひ12月28日に組立て終つた。前回より餘程早い。



六甲星見臺の外観。白亜六角形の建物が観測臺

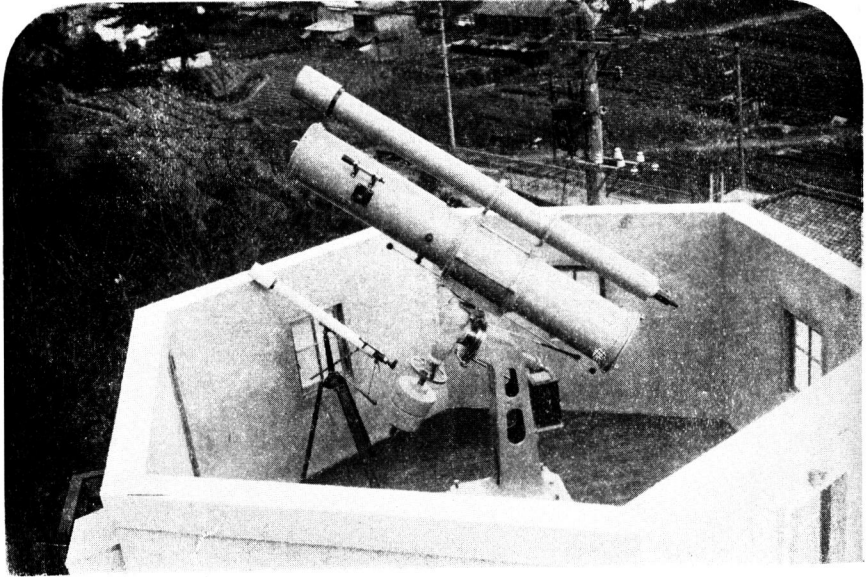
副鏡以外は前回のと殆んど差はない。大いに改良する筈であつたけれど案外それが出来ず、細かな所で十ヶ所位直した外、どの位使ひ易くなつたかは疑問である。Brashear

機の原理をあまり應用しすぎて居るので、前回は微動が全く不出来であつた。今度のは、この點が最も改良されてゐる。然し根本的でない責任は免れない。筒の廻轉は今後25 cm以上には、“ボール”を使用しては如何かと思つて居る。現在でもクランプを締めたままでは、動すとき時計に悪い影響が来る。結局屈折の様に仰向いて見ることが多い。考へねばならぬと思つて居る。

鏡の方は僕が行ひ、26 cmが之れで二個目であつたため、前回よりよく出来たと思つて居るが、中央には山が出来た。焦點内外線には之が見られる。然し、鏡線を支配する所には、急な階段も出来ず、端の負修正は強すぎたが甚だしい under の線は出来ないと思つて居る。然し、鏡は他の公平な経験者に線を見て貰つてからでない、作者の言は單に参考にまでとして置くべきであろう。平面の方が自慢出来る作品であつたが、切り取る時に破つたのは残念であつた。身體が元通りにになれば、作り直す心積で居る。

据付けの方は自分が見て居ないと、これは僕よりも立派な批評又は紹介

新設された六甲星見臺(荻部氏宅)の望遠鏡



者に御譲りした方がよいだろう。

今、望遠鏡を重ねて紹介すれば：

鏡 面 試 験	
r	端(125 mm の帯) = 0.00
125 mm	0.00
110	+0.09
95	+0.01
80	-0.01
65	+0.04
50	-0.05
35	+0.34
20	+0.92

國産反射赤道儀，運轉時計付き。

口径は 31 cm (組，鏡は暫く 26.5 cm F 209 cm を使用) F 240 cm 位。

副鏡は 15 cm 屈折，F 255 cm。

型式は花山の Brashear 25 cm 型，近江の木邊氏のものと同型 (天界159號参照)

光學部以外は西村製作所製。

遊星面，掩蔽，太陽寫眞が**觀測の主目的**

着工は1934年8月中旬

完成は1934年12月28日

一言したいのは、昨年中にこの種のを天文界に二個も迎へたことであつた。中村氏が居られたら如何に喜ばれたか？氏が反射製作の草分けをしられたのであつたが、漸くその果が今頃ぼつぼつ出て來た様な氣がする。いづれ僕がやつたので、缺點も多くあると思ひ荻部氏にも申譯ないと思つて居る。だが、若しこうしたのが今後増加して學界に貢獻があれば、名譽は故人に歸し、成果がなければ自分の不徳に負ふて然るべきだと思ふ。(1935年1月1日記)